

千葉大学医学部同窓会報 第74号 題字 鈴木 五郎

編集兼発行者

千葉大学医学部

るの は な 同 窓 会 報 編 集 部

〒280 市 葉 市 亥 鼻 1 の 8 の 1

千葉大学医学部庶務係 佐 谷 付

電話千葉(0472)22-7171内線2038

香月秀雄千葉大学長 井出源四郎医学部長 再選



香月千葉大学長



井出医学部長

去る六月五日、学長選挙が行なわれ、一回の投票で香月学長が、また六月二十三日医学部長選挙があり、井出学部長がいづれも再選された。任期は、学長・学部長とも本年八月一日より二年である。新しい選挙方法が施行されてから学長が一回の投票で決まったことは始めてであり、また同一人が医学部長を二期続けることも前例がない。新学長・学部長に寄せられる期待の大きき現れといえよう。大学は人文文学部の改組、総合大学院設立の歩みなど重要事項をか

かえ、亥鼻地区では医学部、病院、看護学部、活性研の四部局による共同生活がようやく著につき、医学部では旧病院が改修されて医学部本館となり、ここで基礎、臨床研究施設が一体となつての運営が始まったばかりである。

きめこまかで、しかも強力な推進力を必要とするこの時期に、うつつけの両先生の手腕に期するところが極めて大きい。

昭和五十五年度

るの は な 同 窓 会 総 会、東京で開催

六月二十一日(土)午後四時から錦糸町駅前ロッテ会館で、昭和五十五年度のるの は な 同窓会総会が開催されたが、開会に当って一寸したハブニングがあった。というのは小林会長が定刻にお見えにならず、嶋田・井出両副会長がご欠席というわけで、係一同が時計を見てはじりじりするという一面面があった。幸い今回のお世話一切を引受けて下さった東京るの は な 会の中村会長に開会のご挨拶をお願いすることが出来て、総会はずべり出した。

公私ともに多忙な中をご出席下さった香月学長から千葉大学全体の現況ならびに将来への展望について述べられ、さらに欠席の井出医学部長に代って亥鼻地区の近況についても言及された。これを受

猪之鼻奨学会理事会・評議員会開催

その活動に理解を

財団法人猪之鼻奨学会の理事会及び評議員会は、五月十三日夕、同窓会館にて開催され、昭和五十四年度収支決算、昭和五十五年年度予算を審議可決した。また、役員改選期に当たつたため交見、松本幹会長、湊副会長、井出源四郎常務理事他、理事、監事、評議員の充を討議、石橋文太氏(昭22卒)を推す事となった。

猪之鼻奨学会そのものについては千葉大学医学部百周年記念誌に、松本会長が詳細に記述しているのでも再読がたいが、その設立は大正四年で、当時の千葉医学専門学校長三輪徳寛教授の寄付金が資産の半ば以上を占めて創立された。総則の第三条に「……医学及び薬学の研究を奨励する事を目的とする。」とありそれによつて医学部、薬学部の中堅研究者に年間総額百

和五十五年度予算も承認された。さらに同常任理事から会則の一部改正についての提案があり、二三の質疑の後原案どおり可決された。

今年の講演は千葉大学理学部の前田四郎教授の「房総半島の生い立ちとブランドンの化石」と題するもので、われわれにとつてはまさに「知られざる世界」のお話。ブランドンの様々な種類と構築、その分布などにより古生代から中生代の日本、房総の生い立ちと生物の移り変りなどについて、豊富なスライドを使って話された。それでもブランドンの化石なんてと疑うむきのために顕微鏡まで持参されての実物供覧も行なわれ、極めて成果のある講演会であつた。

講演の後、席を変えての懇親会は東京あのはな会の山崎常任理事の司会が立食パーティ。いづれもながら和やかな交歓がくりひろげられた。

万円の研究補助金が出され、また学生数に奨学金の貸与を行なっている。さらに学術奨励金として千葉医学会(千葉医学雑誌刊行補助)に三十万円、薬学部(学術刊行補助)に十万円を年々贈呈している。創立以来すでに七十年近くなる本奨学会の資産を増し、より多くの学術奨励をするために是非先輩各位があたたかい寄付金をよせられる事が期待されている。猪之鼻奨学会の活動は現今の世相の中ではまさにひとつの清流であり是非各位の心にとめおきねがたい。

昭和54年度決算報告

昭和55年度予算案

A. 収入の部

科 目	予 算 額	年度末収入計	差引高(△減)
財 産 収 入	200,000円	319,993円	119,993円
会 費 収 入	4,000,000	5,345,750	1,345,750
事 業 収 入	3,400,000	6,442,930	3,042,930
寄 附 金	100	51,860	51,760
繰 入 金	0	0	0
繰 越 金	1,877,085	1,877,085	0
収 入 計	9,477,185	14,037,618	4,560,433

B. 支出の部

科 目	予 算 額	年度末支出計	差引高(△減)
1. 事 業 費			
会 報 発 行 費	450,000	646,498	196,498
名 簿 発 行 費	4,200,000	4,380,000	180,000
新 会 員 歓 迎 費	200,000	200,000	0
顕 彰 奨 学 費	100,000	0	△ 100,000
慶 弔 費	50,000	33,200	△ 16,800
支 部 連 絡 費	200,000	130,000	△ 70,000
小 計	5,200,000	5,389,698	189,698

2. 事務費

備 品 費	30,000	0	△ 30,000
消 耗 品 費	150,000	84,180	△ 65,820
通 信 印 刷 費	1,500,000	1,560,996	60,996
振 替 手 数 料	100,000	175,160	75,160
会 議 費	150,000	109,840	△ 40,160
諸 手 当 費	650,000	813,000	163,000
謝 金 費	80,000	79,650	△ 350
小 計	2,660,000	2,822,826	162,826

3. 予備費

基 金 繰 入 額	1,000,000	1,000,000	0
予 備 費	617,185	412,200	△ 204,985
小 計	1,617,185	1,412,200	△ 204,985
支 出 計	9,477,185	9,624,724	147,539
繰 越 額		4,412,894	

基 金 5,000,000+1,000,000=6,000,000

A. 収入の部

科 目	予 算 額	前年度比(△減)	備 考
財 産 収 入	300,000円	100,000円	
会 費 収 入	4,400,000	400,000	
事 業 収 入	160,000	△ 3,240,000	
寄 附 金	100	0	
繰 入 金	0	0	
繰 越 金	4,412,894	2,535,809	
収 入 計	9,272,994	△ 204,191	

B. 支出の部

科 目	予 算 額	前年度比(△減)	備 考
1. 事 業 費			
会 報 発 行 費	650,000	200,000	
名 簿 発 行 費	500,000	△ 3,700,000	
新 会 員 歓 迎 費	200,000	0	
顕 彰 奨 学 費	200,000	100,000	
慶 弔 費	50,000	0	
支 部 連 絡 費	300,000	100,000	
小 計	1,900,000	△ 3,300,000	

2. 事務費

備 品 費	50,000	20,000	
消 耗 品 費	150,000	0	
通 信 印 刷 費	2,000,000	500,000	
振 替 手 数 料	150,000	50,000	
会 議 費	200,000	50,000	
諸 手 当 費	800,000	150,000	
謝 金 費	80,000	0	
小 計	3,430,000	770,000	

3. 予備費

基 金 繰 入 額	3,000,000	2,000,000	
予 備 費	942,994	325,809	
小 計	3,942,994	2,325,809	
支 出 計	9,272,994	△ 204,191	

基 金 6,000,000+3,000,000=9,000,000

これからの亥鼻台

——部局長連絡会メモから——

ここ数年の間に亥鼻台の大学構内には生物活性研が移転して来、看護学部が誕生し、さらに医学部からは機構上独立した亥鼻分館を加えると、医学部と病院だけであった時代とは大分様子が変わってきている。

そこで亥鼻地区の研究・教育の連携や土地の管理・利用の円滑を計るため、医学部長・病院長、活性研所長、看護学部長、亥鼻分館長とそれぞれの事務部長による亥鼻地区部局長連絡会が出来、より話し合いを進めている。ここではその連絡会で取り上げられた、かなり実現性のある将来計画について略述する。

★医学部旧基礎棟はどうなるか

これについては二年程前に出来た利用計画委員会が、今年認められ、すでに予算がつき本年度中に改修の上つぎのように利用されることになった。

①エレベーターより西側の地階から四階まで——亥鼻分館の仮書庫(分館は数年後をメドに新館を計画している)

②旧生化学の一階部分と一部地下——放射線技師学校、旧一階の実習室から病理教室の角までと二階の組織実習室——看護学校、旧第一解剖のあった二階の九室——助産婦学校

③その他の一、四階の大部分——看護学部

④残余の地下部分は当分の間医学部の管理(動物飼育等)

★医学部本館周辺の整備計画は

①木造建築は原則として本館改修後直ちに取壊す。ただし既存の動物小屋、肺研の建物、整形、放射線の教室のあったいわゆる別館などは今しばらく残存しきそう。

②旧精神科の教室は学生の部屋として利用する予定。これに近接した旧薬学の臥豚窟の辺に体育館を建設する計画。これが出来れば旧大学会館は取壊す。

③旧暗視の附近(一外側出入口の近く)は整地され、目下亥鼻分館建設予定地になっているがこれについてはなお流動中。

④旧同仁会食堂——すでに動物実験施設の建物が出来ることになっている。明年度には完成の見込み。なおそれより少し北側にR1施設を立てる予定。

★その他の計画

①凡秋谷周辺の緑は残し、多少の手を加えるが、その際各クラスの記念植樹などが望まれている。

②活性研にはなお建物資格不足面積があり、利用できる土地を求めている。看護学部は看護教育センターの設置を既要求中である

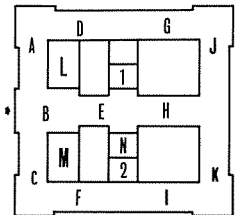
③るのはな同窓会館の新館の場所としては旧学寮、すなわち合同校舎の西側、創立八十五年記念レリーフの北側に予定されている。ただし、看護学部から女子寮を建てて欲しいとの申し出があるので多少の競合はありそうである。

基礎・臨床教室、研究施設、教育施設の配置図 (医学部本館)

	地 階	1 階	2 階	3 階	4 階	5 階
A	解剖体関係 電子顕微鏡関係 ラジオアイソ トープ実験施設	解剖学(第1)	生理学(第1)	薬 理 学	衛 生 学	大講義室
B		正面入口ホール	カンファレンス・ ルーム	会議室・ VTRセンター 医学部長室	展示室・ 実験動物施設 のはな同窓会 ・千葉医学会	
C		事 務 部	生 化 学(第1)	病 理 学(第1)	公 衆 衛 生 学	
D		解剖学(第2)	生理学(第2)	微 生 物 学	歯科口腔外科学	
E		学 生 控 室	レントゲン関係 施設	脳研(神経薬理)	環境疫学(農村 医学・免疫)	
F		事 務 部	生 化 学(第2)	病 理 学(第2)	寄 生 虫 学	
G		解剖学(第3)	内 科 学(第3)	産 婦 人 科 学	耳鼻咽喉科学 小 児 外 科 学	
H		麻 酔 学	整 形 外 科 学	脳研(神経内科)	神 経 精 神 医 学	
I		法 医 学	肺研(第1臨床) 肺研(第2臨床)	肺研(病'理) 皮 膚 科 学	眼 科 学 放 射 線 医 学	
J		外 科 学(第1)	内 科 学(第2)	泌 尿 器 科 学	小 児 科 学	
K	外 科 学(第2)	内 科 学(第1)	脳神経外科学			
L	解剖実習室	組 織 実 習 室	生理学・ 薬理学実習室			
M	微生物学・ 寄生虫学実習室	生 化 学 実 習 室				
1		第 1 講 義 室				
2		第 2 講 義 室				
N		食 堂				

旧附属病院(医学部本館)の内
装改修工事の完了に伴って、五月
から進められていた、基礎・臨床
教室、研究施設および事務部の引
越し作業は八月で終了した。本館
内の各部局の配置は別記の通りで
ある。

医学部本館案内



図の矢印：正面入口

昭和42年卒

クラス会

四年前に卒後何回目かの42年クラス会が開かれ、オリンピックの年にクラス会をしようということになりました。今年はクラスの谷口君が母校の免疫の教授に昇任され、また四年前のクラス会の時病に臥していた金木君は開業という社会復帰を成しとげました。谷口君の教授就任祝いと金木君の全快祝いを含めて六月十五日に千葉市のほてい家で42卒のクラス会を開きました。遠くはシンガポールのWong君をはじめ、金沢(高橋弘)、富山(伊藤、軽井沢・笠井、筑波(更科・野勢夫妻・佐野、栃木(本多・門馬)、埼玉(金木夫妻・冠木・高田)からの出席を得、当日の出席者は57名にも及び、会場から学生時代の授業の出席率より良いとの声に拍手喝采が渦巻きました。アルコールと料理をつまみながら、お互に近況報



告やら卒後13年の経験からの医学(医療)の思想等を述べあいました。談笑はつきなく、当初の予定をはるかに越えて、20時過ぎまで会場はにぎわっていました。

医学教育とりわけインターン制のゆれ動く中に卒業してから13年にもなります。現在千葉大学で後輩の指導及び研究生活をしているものは15名となりました。千葉県に勤務しているもの23名(開業5名)東京勤務が15名、他府県勤務が39名(開業14名)と夫々の方向性は定つてきたようです。またクラスから教授1名、助教授3名、講師十数名とこちらの方はまだまだ発展途上にあると思われま

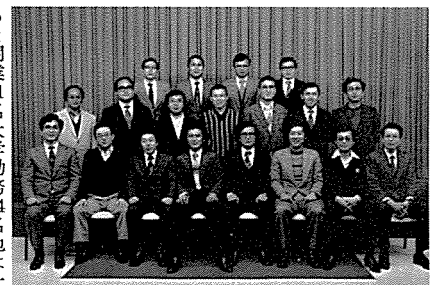
す。同級生諸兄の健康と御活躍をお祈りいたします。
(昭和55年度幹事 平賀一陽記)

昭和44年卒

クラス会

我々のクラスは卒業してからはや11年を経ました。区切りの良い10年目にクラス会を行なう予定でしたが幹事の手違いから一年遅くなり、昭和55年3月8日千葉市のほてい家で開きました。参加者は20名で一人一人が現況と苦労話をして楽しい一時を過ごし、二次会も全員参加で話が尽きませんでした。二次会費は開業している連中がもつという事になり彼等の存在は心強い限りでした。

参加20人中開業医は4人勤務医9人大学の勤務医が7人で開業している先生の参加が少数でした。ちなみに卒業生99名を勤務別に分け



ると開業21名大学勤務24名他は大学以外の勤務医でした。開業する先生が増加しつつあるのは我々が適當年令に達したためと思われる。また助教授・講師になられた先生もありそろそろ教授の誕生も近いことと期待しています。

我々の卒業当時は学生紛争の真ただ中で卒後の研修を始めるまで時間がかったため、かなりの人が大学を離れました。そのためかクラスとしてのまとまりが欠けるくらいがあり、クラス会を頻繁に開く必要を感じました。卒後7年目にして初めてクラス会を開いた時参加者は33名でしたが今回は20名と少なく、幹事の力の無さを感じると共に今後多勢の仲間出席させるにはどうしたらよいか悩んでいます。一度もクラス会に出ていない方次回には是非出席して下さい。

(西島 浩記)

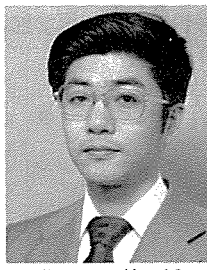
新任教授紹介

医学部附属環境疫学
研究施設免疫研究部

谷口 克教授

外科学第一講座 奥井勝二教授

東大血清学教室へ移られた多田
富雄教授および本年3月退官され
た伊藤健次郎教授の後任として、
それぞれ谷口 克氏(昭42年卒)
および奥井勝二氏(昭28年卒)が
決まったので、両教授から新任の
挨拶をいただいた。



谷口 教授

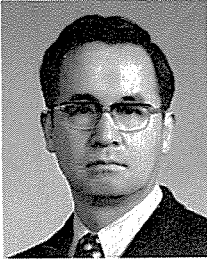
免疫研究部は、昭和四十九年に
環境疫学研究施設の第二部門とし
て発足してから、まだ六年の歳月
を経たばかりの新しい教室であ
ります。全国に先駆けて千葉大学
に免疫学研究の部門が設置されま
したことは、諸先輩方々の、この
方面における輝かしい業績と伝統
があったからであろうと思われま
す。

とくに、最近の免疫・アレルギー
学の進歩は目覚ましく、その分
野も従来の免疫化学、免疫細胞生
物学を基礎とする研究から免疫遺
伝学、分子免疫学へと進展を遂げ
つつあります。このように現代は

免疫学の激動期にあります。千
葉大学が今日なお日本のみならず
世界的に著名なアレルギー・免疫
学者を数多く世に送り出している
のは、一九三〇年以後、当大学の
馬杉、加賀谷教授ら、さらに近年
では岡林、多田教授らをはじめと
する諸先輩によって育かれた近
代免疫学の土壌が基盤になってい
ると言っても過言ではありません。

このような素晴らしい環境に恵
まれた私共は誠に幸運であります。
これからも千葉大学における免疫
・アレルギー学研究が臨床・基礎
医学の領域でますます発展するよ
う教室ともども努力する所存でご
ざいますので、何卒ご指導、ご鞭
撻をお願い申し上げます。

(谷口 克)



奥井 教授

去る8月16日付で千葉大学医学
部第一外科教室主任教授を拝命致
しました。その責任の大きさを痛
感しております。私どもの教室の

歴史は古く、三輪徳寛先生が明治
22年(一八八九年)現在の千葉大
学医学部の前身学校である第一高
等中学校医学部の外科教授として
赴任されたときにはじまり、その
後、高橋信美先生(大正14、昭和
15年)・河合直次先生(昭和16年
・34年)・綿貫重雄先生(昭和34
・49年)・伊藤健次郎先生(昭和
50年・55年)が主任教授を勤めら
れ、歴史と伝統を有しております。

この間に鈴木五郎先生、香月秀雄
学長はじめ多くの同窓生が教室か
ら巣立って行き、現在五百名余の
先輩同僚が全国各地で活躍されて
おります。

現在教室では、綿貫教授・伊藤
教授時代の研究テーマである消化
器外科・心血管外科・内分泌外科
等多岐にわたっております。これ
らの研究業績を積み重ねて行く責
任があります。幸い多くの優秀な
医局員を擁しておりますので、ご
期待に沿うべく努力する所存です。
最近これらの領域においても、高
度に分化しつつあり、ややもすれば
生物学の基本理念から逸脱しや
すい向もあります。臨床医学の特
性を生かし、広い視野から研究を
進めて行きたいと考えています。

私事になり恐縮ですが、現在あ
るはな同窓会常任理事として、会
報編集の責任をおおせつつあり
ます。会報は現在年四回の発行
を原則として、数名の編集委員に
よって発行しております。本誌は
学外、とくに遠くにおられる会員
に親しまれていて聞いておりま
す。会員諸兄におかれましては、
身近なニュース、お気づきのこと

などありましたら、編集部にお知
らせ下さい。本誌が会員諸兄に愛
読される、実のある同窓会報にな
ります。

市原めのはな会発足

(奥井勝二)

母校のある千葉市のすぐ隣の市
であり、会員有資格者も30数名を
数えながら、今まで市原市にはあ
るはな同窓会支部はなかったが、
この度、百瀬剛一名誉教授が千葉
労災病院長として、また村上泰邦
氏が市原保健所長として就任され
たのを機会に、市原めのはな会を
作ろうという気運が急に盛り上っ
てきた。そこで、御両名の就任祝
賀歓迎を兼ねて、昭和55年4月23
日夜、市内八幡の料亭「すずき」
で初会合を行った。

会の運営には、会長・川越不二
男、顧問・鎗田衡平、世話人・朝
雄、齊藤および高沢があたり、会
の名称は「市原めのはな会」とす
ることで各位の合意を得た。

市原市には公立病院として、千
葉労災病院、県立鶴舞病院の二病
院があり、いずれも千葉大系列病
院として、市原市の医療の中核的
存在となっているが、ベッド不足
という声は依然として市民の間に
あり、私立大学病院誘致や大きな
私立病院の建設等の話題が絶えな
い。

今までは、多人数の本学出身者
が市原地区におり、他大学出身者
に対して遠慮していた向もあった
が、これからの市原市の医療は千
葉大を頼りにすべきである旨を強
調する必要があるというのが本会

るよう努力も致したいと考えてお
ります。

設立の主旨でもある。

なお当日の参加者は次の通りで
あった。鎗田衡平(昭11、百瀬剛
一(昭13、川越不二男(昭14、長
島豊晴(昭19、村上泰邦(昭20、
朝雄徹三(昭21、吉岡宏三(昭23、
宮崎隆次(昭23、齊藤嘉一(昭23、
朝雄 稔(昭25、鈴木和夫(昭25、
杉田喜久寿(昭25、遠山寅雄(昭
27、寺島克郎(昭28、山本邦雄(昭
29、中野操一(昭29、清水良平
(昭30、高沢五郎(昭31、相楽恒
俊(昭31、内田威郎(昭32、倉持
正昭(昭34、滝西修司(昭39、渡
辺十九六(昭45)。

(齊藤嘉一記)



日本学術会議第12期 会員選挙について

第12期の会員選挙が今秋行なわ
れます。×切日は十一月二十五日
となっていますが、投票用紙なら
びに説明書がお手許に届きました
ら、お早目に郵送して下さい。

本学からは本間三郎教授が関東
地方区で立候補され、金沢大学で
は黒田恭一教授が臨床で、新潟大
学では渡辺徹一教授が公衆衛生で
立候補されています。

るはな同窓会員の有権者各位
には、なにとぞお忘れなくご投票
下さるようお願い申し上げます。

書評 夜のホームドクター

上野恭一著(昭31卒)

序文に武見太郎日本医師会長の
写真入りで「ホームドクターくら
い医師にとって、生き甲斐のある
生活はないと、私は信じている。
……二十四時間とに生きている、
どの様に考えて生きているかは、
患者諸兄にとって知りたいと思っ
た。裸になった上野先生の人間性を自
ら示した処に読み処があると思う
……」と巻頭言が光っている。前半は
著者が余暇をみつめて、家族と一
緒に世界各地を旅行した紀行文で
著者の人間性が出てくる。後半は
埼玉県朝霞市医師会一九七二年
四月から現在迄行なっている夜間
診療の実態が詳細に述べられてい
る。緊急医療は、現在大問題であ
り、それに対する一つの生きたデ
ーターが示されているような気が
する。

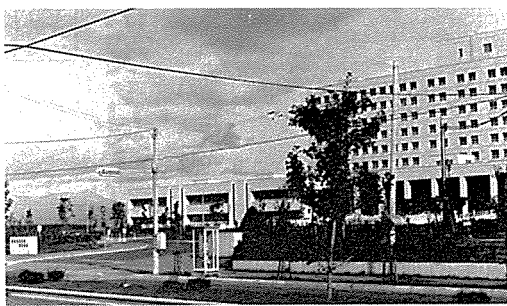
旭川医科大学だより

教授 海野徳二(昭33卒)

旭川医科大学は、戦後の国立単科医科大学の第一号として、昭和四十八年に発足した。旭川は、国内最低気温記録地とのことだが、近年は昔ほど寒くはなくなったと言。周囲を山に囲まれている盆地であるから強い風が吹くことはあまりない。冬は有難いが夏は暑くなることがある。大雪山系の山が教室の窓からよく見えて美しい。札幌―旭川間は特急で一時間四十分、東京から旭川空港に直接飛ぶことも出来る。旭川の人口が約三十五万、大学が岡の上にある点からも何年か前の千葉大学に似ている。

単科大学であるので、学生は一年―六年という呼び方をする。五

こ だ ま



受持ち、同時に教務委員を努める。いさか過保護だと思いが現代の流行のようだ。

旭川医大は教授・助教授の大部分が北大出身者であり、北大の習慣がそのまま受け継がれているように見受けられる。私が

旭川医大は教授・助教授の大部分が北大出身者であり、北大の習慣がそのまま受け継がれているように見受けられる。私が

る。アナム(ネーゼ、カンファ(レンス、スタ(ツス)・ブレ(ゼンス)などと言う。短く発音するとそれだけ寒さに対する防禦にでもなるのだろうか。アナム・アナムと言われると南無南無とやられているようでやり切れない。北海道の医療の歴史は北大と共に育つて来たという事実があるから、旭川医大の教官分布からも分るように、大病院の要職の大部分も北大出身者で占められている。旭川医大の卒業生の将来が気になり点である。この難問解決のために、ゐるのは会員の諸先生方も是非お力をかしていただきたい。

千葉県救急医療センターは、脳神経外科、循環器科等を主体とした重症患者の救命救急処置をする三次救急医療施設であり、一次(初期)および二次救急医療施設を含めた千葉県の救急医療体制の一環として機能する特種専門医療施設として設置されたものであります。従つて原則的には、一次または二次救急医療施設でスクリーニングされた患者を常時二十四時間受け入れ、いわゆる通常の外来診療は全く行なっていない。

千葉県救急医療センター

センター長 野口照義(昭32卒)

流釣りなど楽しいことも多い。旭川医大の卒業生たちのために力を借りたのと同時に、こちらに住んでみようという方は居られませんか。心から歓迎いたします写真でははつきりしない大雪山系の山々を実際に見ていただきたいものです。

す。一階には、院内感染対策上、医療従事者と患者搬送用の診療廊下と一般用の廊下があり、前者に患者受入部門(洗浄室、診察処置室、放射線診断部門(全身用CTスキャナ、血管撮影装置)、手術部門(三手術室)、中央滅菌材料室ICU、CCU、高圧酸素治療室薬剤部門などが連なり、一般廊下側には、医事事務室、情報管理室、当直センター、厨房食堂、面談室、売店その他が設置されています。二階は、三単位より成る病棟(80床、検査部門(一般検査、生理・細菌・病理各検査、RI検査など)、フォトセンター、面談室のほかセンター長室、各部長室、医局、看護部、事務局、会議、図書資料室などの管理部門があり、センター全体として、ICU、CCUの各十床を含め百床の施設であります。別棟には、霊安室、解剖室、標本室のほか機械室などが設備されています。患者搬送用には、救命救急処置に必要な各種医療機器を設備し、

医師・看護婦が同乗出来るドクターズカーが既に設置されているほか、患者空輸のためのヘリポートをセンター近くに設置予定で準備を進めております。

職員の数、医師40(研修医10名を含む)、看護婦150、薬剤師9名、放射線技師それぞれ15、11など総数で284名ですが、本年5月1日現在、医師16、看護婦77など総数で167名です。従つて全床全施設の稼働は困難なのが現状で、現在医師・看護婦など医療従事者の確保に誠意努力中です。職員の充足につれて、一日でも早く全床の開設にこぎつけたものと願っています。

(昭和55年5月)



お知らせ

来10月25日(土)3時より、改装なった医学部本館のご披露を行います。いずれ会員各位にお知らせが届きますが、今からご予約の上、ご出席下さい。

訃報

故赤松茂名誉教授を偲ぶ

附属病院
中央検査部長

降矢 震



先生は大正八年東大医学部を卒業、同十一年千葉医学専門学校教授、同十三年千葉医科大学教授となられ、昭和三十五年停年退職なされるまで、三十八年の永きに亘り本学のために力を尽されました。その間附属図書館長、臨時医専主事、大学評議員等の要職を経て昭和二十七年千葉大学医学部長、千葉医科大学学長となられました。学外においても学術奨励審議会委員、大学設置審議会委員等として重要な任を果されました。昭和四十四年その多大な功績により勲二等に叙されております。

先生は生化学における世界的な権威でありました。大正十一年ベルリンのカイザーウィルヘルム研究所ノイベルク教授のもとに留学され、御帰朝後日本生化学会の設立発起人として御尽力、昭和三十三年同学会総会長、三十一年には同学会創立三十周年記念総会長をとめられ、御退官後は生化学会名

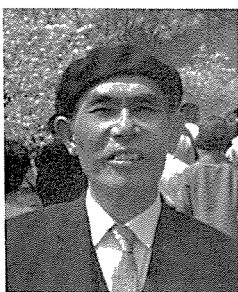
譽会員となられました。

先生の研究分野は主として酵素化学で、特に燐酸酵素に関しては世界の第一人者でした。各種酵素の精製と分類、その動力学的研究、酵素模型、酵素による核酸構造の解明など、生化学史に多大な業績を残されました。また血液の各種成分の微量測定にも力をそがれ、現在ホスファターゼ測定の国際的標準法に用いられているパラニトロフェニル燐酸は先生の創製にな

るものです。先生は百数十人の門下生を育成

児玉勝利君を憶う

名誉会長 鈴木五郎



昭和五十五年五月四日莫逆の友児玉君は享年七十六で遂に逝かれた。あの第一外科医局で頑丈な樺の大机をはさんで毎日のように談論風発、意気投合し、時には相

されましたが、学生の教育にも極めて御熱心で、著された「生化学」はその講義にも似て、要点を尽して明快、医学生のみならず他学部の標準的な教課書として広く用いられております。

このように威大な先生も御年八十五才、五月七日十九時十九分永眠なされました。今ここに先生の御遺徳を偲びつつ謹んで弔意を捧げ、心より御冥福を御祈り申し上げます。

先生には生前の御功績により正三位が諡られました。

× × × × × × × × ×

なお、赤松先生のご遺族から、猪之鼻奨学会に対して三十万円の寄附がありました。厚く御礼申し上げるとともに、皆様にお知らせ致します。

反論した仲であり爾来今日迄交ることなき交友であれば思出は限りない。私の生涯を通じて忘れることの出来ない尊い友の一人である。茲で私は我があのはな同窓会員も忘れることなく語り伝えられるであろう児玉君を偲び回想する。大学医局在籍時代を等しくした者は誰もがあの風土、日々の活動、ハッピーニングを思い浮べると思うが私は児玉君といえば直ちに同窓会を連想する。あの頃、谷川、友永、吉田、犬飼、田村等々諸氏と

共に今日のあのはな同窓会を形成するに並々ならぬ努力をした一人であり、その活躍は別なものがあつた。高橋門下として猛烈という程に勉強し、特にレントゲンに熱中し、教授の信を得、レ線学会にも知られる新進として私に誇りにも思つた所である。イレウス時、立位腹部単純撮影に関連する思出は多い。今日でもイレウス、胃穿孔等のレ線像を見る毎に必ず君を思う。此の字間に熱中であつた君が一度同窓会問題に取組むや一切の勉強放擲を宣言して東奔西走する態は今も目に浮ぶ。一外の第四研究室(四研)は恰も同窓会設立事務所の如き観があり、屢々谷川助教等と鳩首凝議、時に抱負をかきかき又会則案文を見せたりという事もあつて、今日のあのはな同窓会の基礎は実に君の活動による所の多いことを知る。時に学内の徹底的改革をも企図したものである。熱意と行動には烈しいものがあつた。為に教授会の不詳を買って事情已むなく、私の勧告もあり昭和十五年十二月医局を去つた。同窓会は立派に成立したのである。私は一外の一偉才を失うことに限りない寂しさを味つたものである。

八年七月酷暑のさなか診療中倒れ歩行も不自由となつてからも、あの貞淑なる令夫人に支えられ幾度か千葉へも来られた。繰返す再発を克服して十数年、愈々医局、同窓会を思うの念熾烈さを増したに見える。最後の手紙は口述を令夫人が記されたものだが「ああ医局なるかな、医局なるかなと郷愁を感じる。……郷里に帰つてから半世紀、その生活は医局の延長に過ぎません……」と思いを込め全く虚飾、誇張でなく本心を吐露し、若い頃医局で相談すると全く同様である。

医局、そうして四研、あのはな同窓会、何れも若き時代に情熱を燃やした環境であり、七十六年の生涯を通じて離れず、その生活は如何なるときも医局の延長という私は斯うした純情を同窓の皆様に伝える。葬儀に参列出来なかつたが茲に相許した友の在り日々の姿の一端を述べて遙かに御冥福を祈る。(一九八〇・六・一〇)

人事異動

○石山信之氏(歯口科・東京医歯大・昭和46年卒)・講師昇任(55・4・1)
○藤本重義氏(免疫・昭和38年卒)・高知医大教授転出(55・4・1)
○牧野英一氏(二内・昭和42年卒)・講師昇任(55・5・1)
○谷口 克氏(免疫・昭和42年卒)・教授昇任(55・6・1)
○安達恵美子氏(眼科・昭和37年卒)・助教昇任(55・7・1)
○奥井勝二氏(一外・昭和28年卒)・教授昇任(55・8・16)

事務室移転のお知らせ

このたび旧病院が改修され医学部本館として新たな歩みを始めることとなりましたが、あのはな同窓会事務室も、今までの記念講堂から本館内に移転しました。

新事務室は本館四階の正面(旧歯口科技工室のあたり)で、千葉医学会、猪之鼻奨学会の事務室と同室となりました。電話の内線番号は50088です。今後はこちらへご連絡下さるようお願いいたします。

編集後記

○冷夏の候も過ぎ九月も中旬に近づいたら暑い日が続いている天候異変の感がする昨今ですが、同窓会報74号をお送りします。本号にも多くの方々より玉稿頂戴し、六頁となりました。赤松・児玉両名誉会員の訃報をお知らせします。ご冥福を祈ります。

○旧病院(医学部本館)の改修工事完了し、引越しも終り、会員諸兄にとつてなじみ深い場所で、基礎・臨床同じ建物で教育・研究が行なわれようとしております。三面に各教室・研究施設の配置をお示しました。医学部にお出の際、お役にたつかと存じます。内科・外科は昔に比較して、狭くなり廊下にロッカー・冷蔵庫などが仕方なく置かれているのが現状です。(奥井勝二)